

作家ヨーゼフ・ツォーデラーを訪ねて¹⁾ —短編集『メラーンの空』(2005) 試論—

(平成18年12月15日 受理)

人間科学講座 今井 敦

Besuch bei Joseph Zoderer Versuch über seinen neuen Erzählband „Der Himmel über Meran“ (2005)

(Received December 15, 2006)

Kyushu Institute of Technology Atsushi IMAI

2006年3月、南チロルに、作家のヨーゼフ・ツォーデラーを訪ねた。ツォーデラーは、現在イタリア領となっている南チロルの古都メラーン出身である。ほんの数ヶ月前に彼は、短編集『メラーンの空』(*Der Himmel über Meran*, 2005)を出版したばかりだった。

私がツォーデラーに会いたいと考えた理由は次の通りである。三年ほど前、『手を洗うときの幸福』(*Das Glück beim Händewaschen*, 1976)以降の彼の小説を纏めて読む機会があった。その後、この作家について日本語で一本、ドイツ語で一本の論文を書いたのだが、小説『慣れることの苦しみ』(*Der Schmerz der Gewöhnung*, 2002)を論じた後者は、作家自身読んでくれた、と、人づてに聞いていた²⁾。私は、忘れられない内に本人に会ってみたいだったのである。作品を通じて知ったこの作家が、本当に自分の理解したような人なのか、確かめたかった。というも私には、彼の作品は一つの例外もなく、日本で言うところの「私小説」にあたるように思われたのである。ツォーデラーの小説に書かれたことはかなりの部分、自己の生活の暴露であり、人生の作品化だと思われた³⁾。私はそれを、作家本人に会って確かめたかった。70歳になったばかりのツォーデラーに今会わなければ、機会は失われるかもしれない、とも考えた。

宿を取ったインスブルックから何度電話しても通じなかった。通じたと思ったときには、受話器を取った相手に、「そんな作家はここにいません」、と言われた。仕方なく本人からのFAXに書かれてあった携帯の番号に電話した。するとすぐ本人が出た。名前を告げると、「ああ、私の日本の友人じゃないか」、という親しげな声が聞こえた。私は嬉しくなった。引越しをしたので、前に知らせた番号はもう使っていない、とのことだった。電車でブルネックまで行けば、迎えに来てくれるという。

約束の日の午前、私は電車でブレンナーを越えた。近年になく長い冬がようやく終わりを告げ、日差しが暖かくなってきた3月下旬のことだった。オーストリアからイタリアにまたがる険しい山々を眺めていると、コンクリートばかりの東京や小倉の町がいかにも鬱陶しく思い出された。フランツェンス・フェステでイタリアのローカル線に乗り換

え、東へ伸びるプスターールに入った。このルートを私は、インスブルック留学時代にしばしば通った。ブルネックを訪れるのは六年ぶりだった。アルプスの長閑な山並みの中を40分ほど走ると、懐かしい町が窓外に広がった。

„Prossima Fermata Brunico, nächster Halt Bruneck!“ 車掌のアナウンスが二ヶ国語で入った。私は降りる支度をして降車口に向かった。列車が止まるか止まらないかするうちに、待ちきれずにレバーを回し、止まった瞬間もう地上にいた。列車からは次々と観光客やスキー客、地元の人々が降りてきた。私はそそくさと電車の前を回って線路を渡り、出口に向かった。駅の勝手は知っていた。眼前に広がるアルプスの高峰を横目に見ながら、駅舎を通り抜け、外へ出た。小さな車寄せがあって、バスが止まっている。六年前と変わらぬ風景だ。

そこへ、ほとんど間を置くことなく一台の車が走って来た。運転席を見ると、写真で見慣れたヨーゼフ・ツォーデラーがこちらを見ていた。とても70歳とは思えない。50代くらいに見えた。本のカバーにあった写真と同じ、鍔広の帽子をかぶっている。普段愛想笑いの苦手な私なのに、自然と笑みが浮かぶのを感じた。

いかにも山の中を乗り回しているという感じの、雪や坂道に強そうな年季の入った車だった。近くの駐車場にそれを止め、レストランで食事をとりながら話をした。それは、ブルネックの小さな繁華街にある、かつて入ったことのあるレストランだった。「この人はこんなに身近なところにいたのか。ひょっとすると一度くらいすれ違ったことがあったかも知れない」、と、そのとき思った。

ヨーゼフ・ツォーデラー

ヨーゼフ・ツォーデラーは、1935年生まれだから、既に70歳を越えている。南チロルのメラーンに生まれた。4歳のとき、いわゆるヒトラー・ムツソリーニ協定⁴⁾により、家族ともども故郷を去った。移住先は、ナチス・ドイツで「オストマルク」と呼ばれた現オーストリアのグラーツだった。グラーツで過ごした空襲下の少年時代は、自伝小説『手を洗うときの幸福』(1976)に詳しい。第二次大戦後、スイスのヴィドナウにあるイエズス会系寄宿学校に入るが、学校を飛び出し、メラーンに戻った。戦後一家はイタリア国籍を認められ、両親や兄弟は先に帰っていたのである⁵⁾。しかし、ツォーデラー自身にメラーンの記憶はほとんどなく、初めて見る土地と言ってよかった。

ボーツェンのギムナジウムを卒業後、ウィーン大学で学びながら新聞記者として働いた。彼が記事を書いたのは、オーストリアの代表的新聞 *Kurier*、*Die Presse*、*Die Kronenzeitung* である。本人の言によると、「スター・ジャーナリスト」⁶⁾ だったという。同じ頃、初期の短編小説群が生まれている。1962年から65年にかけて、つまり20代後半の頃である。31歳のときに最初の長編小説『向こうの丘』(*Der andere Hügel*, 1995)が完成され、32歳から33歳のときに、長編第二作『路上の穴』(*Schlaglöcher. Dauerwellenroman*, 1993)が書かれた。

当時の彼はヌーヴォー・ロマンの影響を強く受けており、アラン・ロブ・グリエの小説に見られる実験的手法、カフカの不条理性、シュール・リアリズムのグロテスクといっ

た特徴が顕著である。とりわけ、ツォーデラーが「反小説」⁷⁾と呼んだ『路上の穴』では、通常の句読法や文法、定型句などが、使い古された言語的因習として退けられ、新しい表現の創造が企てられている。作家自身の言によれば、「我々はその背景を問うことなく日常用いている言葉の殻、つまり支配者言語を剥ぎ取ることによって、現実を意識化するための文学的貢献をなすことが出来るのではないか」⁸⁾と考えたという。

小説『路上の穴』を書き終えた頃の1969年夏、ヴィーン郊外ドルンバッハに住む彼の許を、一人の南チロル人が訪れた。詩人のノルベルト・C・カーザーである。出来上がったばかりの原稿を読んだカーザーは、強い印象を受けた。同年彼は、ブリクセンで行なった講演の中で、南チロルの「最初の希望に満ちた文学者」⁹⁾として、ツォーデラーの名を挙げた。この講演は、「ブリクセン講演」として後に有名になる。カーザーは、郷土を讃えるだけの月並な牧歌に過ぎないそれまでの南チロル文学を、「死んでいる」、「存在しない」¹⁰⁾と総括する一方、ツォーデラー、ヘルベルト・ローゼンドルファー、クラウス・ガッターの仕事に新しい文学の希望を見出した。だが、こうした評価にもかかわらず、ツォーデラーの初期作品は90年代に至るまで陽の目を見ることはなかった¹¹⁾。

ツォーデラーは、オーストリア人であった最初の妻との結婚が十年で破綻すると、半年間、中・北米大陸へ貧乏旅行に出掛けた。ヒッチハイクと長距離バスを使い、ファーストフード店で掃除夫の仕事をしながらの放浪生活であった。1970年、34歳のときに南チロルに帰っている。

政治参加とアイデンティティー探求

ヨーゼフ・ツォーデラーは、同世代の少なからぬ知識人同様、68年運動の刻印を強く帯びている。南チロルに戻った彼は、イタリア国営放送ポーツェン支局で働きながら、院外野党運動に積極的に関わった。ポーツェン県議会¹²⁾で圧倒的多数を占める南チロル人民党(SVP)の辛辣な批判者だった。

ここで少し、当時の南チロルの状況を振り返っておかねばならない。周知の通り南チロルは、第一次大戦後のサン・ジェルマン条約によってオーストリアからイタリアに割譲された地域の一つである。割譲当時イタリア人は人口の3%を占めるに過ぎず、90%までがドイツ語を母語とする住民だった。ところが、ファシズム下の入植政策によりイタリア人住民は爆発的に増え、第二次大戦後には30%を越えるまでになっていた。イタリア政府は、戦後もファシズム期と同様の入植政策を続ける一方、「パリ協定」¹³⁾で約束されたドイツ語住民の自治を実現しようとはしなかった。こうした中で、オーストリアへの返還もしくは大幅な自治権獲得を目標に掲げた南チロル人民党は、長い間、60%を越える支持率を保っていたのである。

しかし、ツォーデラーから見てその自治政策は、イタリア人とドイツ語住民の共存ではなく、対立を煽るものであった。そもそも南チロルでは、政治においては南チロル人民党が、言論や出版においては、ドイツ語日刊紙の発行元アテージア書店の力が圧倒的だった。南チロル人民党とアテージア書店は、その保守的でカトリック的な傾向、ドイツ的民族性を守り、イタリア的なものを拒むという姿勢において根を同じくしていた。

南チロルではこうした「郷土防衛者」を自認する人々による、画一的で排外的な主張が支配的であり、外来のものや新しいものに目を開こうとしない、というのが、若きツォーデラーの批判だった。

そもそも、貧しい労働者の子として育ったツォーデラーは、不利な立場に置かれた人々に常に共感を寄せており、彼にとって社会的・政治的問題は決して傍観すべきものではなかった。ジャーナリストとして、またデモンストレーションの形で院外野党運動を展開しながら、彼は、南チロルという閉ざされた社会を揶揄する詩を書いた。これを纏めたのが、最初の詩集『地面に口を』(*S Maul auf der Erd oder Dreckknuidelen kliabn*, 1974)である。南チロル方言で書かれ、ミュンヘンの出版社から刊行された。この詩集は、その文学的質と反骨精神によって地元では賛否両論を巻き起こした。ブレンナー以北での反響は好意的だった。*Tiroler Tageszeitung*は、「自らの方言、書かれた方言の持つ因習的機能を打ち破り、これを政治的・社会的^{アンガー・ジュマン}参加に使えるものにした」と評価したし、*Die Kronenzeitung*も次のように書いた。「この詩集は郷土を讃える牧歌とは何の関係もない。南チロルに住む普通の人々の生活の現実を、時には怒りでいきり立ち、また時にはただ観察し、見分け、洞察するように映し出したものである」¹⁴⁾。

デビュー作『地面に口を』に続いて、翌年には二冊目の詩集『11度目の脱皮』(*Die elfte Häutung*, 1975)を発表した。さらに翌年、初めて長編小説の出版を実現した。『手を洗うときの幸福』である。これは、フラッシュバックを多用した自伝小説であり、戦後間もなくスイスのイエズス会系寄宿学校に入った青年の心象風景を、空襲下のグラーツで過ごした少年期の記憶と絡ませて描いた佳作である。複数の時間の共在、語り手と主人公の視点の一致、自伝と創作の判別しがたい混交、といったツォーデラーの特徴が効果をあげており、人物は生き、言葉は印象深い。この小説は、ツォーデラーの書いたものの中でもとりわけよく読まれる作品となった。

79年には三つ目の詩集『厚紙表紙詩集』(*Pappendeckelgedichte*)を出している。しかし、ヨーゼフ・ツォーデラーの名を一躍有名にしたのは、何と言っても小説『イタリア女』(*Die Walsche*, 1982)である。1981年、第5回インゲボルク・バッハマン・コンクールに招かれた彼は、当時執筆中であったこの小説から、一部を朗読したのである。審査員席に座っていたのは、ヴァルター・イエンス、マルセル・ライヒ＝ラニツキ、ペーター・ヘルトリング、アドルフ・ムシュクといった顔ぶれだった。招待された候補者は30人いたが、多くの人に容赦ない酷評が浴びせられた。ところが、ツォーデラーは高い評価を得たのである。

「南チロルの村人たちの運命は、私にはどうでもいいことだ」、「この散文のテーマに私は何の興味もない」、ライヒ＝ラニツキは言った。それでいて彼は、ツォーデラーの朗読に次第に引き込まれ、「ほとんど感動を覚えた」と述べている。つまり、この小説が素材に左右されることのない文学的質を持っていることを認めたのである。

アドルフ・ムシュクもまた、「ひどく心を動かされた」、と述べたあと、ライヒ＝ラニツキとは反対に、「南チロルにおける文化的ジレンマ」に強い関心を示した。「この小説からは、怒りと悲しみと憤りの声が繰り返し語りかけてくる」という。ヘルトリングやイエンスも、朗読されたテキストの質を率直に評価した。この文章がなお彫琢を要する

草稿であることを認めながら、審査員諸氏は、ツォーデラーの作家としての資質を請合ったのであった¹⁵⁾。

反響は大きかった。出版社から、引く手が数多あった。完成された小説『イタリア女』は、翌年カール・ハンザー書店から世に出ることとなる。

ところで、ムシユクが聞いた「怒りと悲しみと憤りの声」とは何であろうか。端的に言えばそれは、南チロルという偏狭な「村社会」に対する告発の声であった。この文学的出世作は以後、その文学的質にもかかわらず、主に内容面において議論的とされることになる。作家にとっては不本意だったのであろう。

『イタリア女』以後ツォーデラーは、寡作ではあるが着実に物語作家としての仕事を積み上げてきた。自らの北米旅行に材を取った小説『ロンターノ』(*Lontano*, 1984)、トリエステを舞台にした小説『持続的な朝焼け』(*Dauerhaftes Morgenrot*, 1987)、メキシコを舞台とした小説『海亀祭』(*Das Schildkrötenfest*, 1995)、何れの作品も、南チロル出身の主人公が未知の世界を旅するさまを描いたものである。長編小説『慣れることの苦しみ』(*Der Schmerz der Gewöhnung*, 2002)もその例に漏れない。自らの過去を検証するためシチリアに逗留する南チロル人を描いたこの小説は、『イタリア女』で扱われたテーマ、つまり、南チロル社会に見られる文化的軋轢と、その中で分裂し、失われてしまったアイデンティティーの探求を描いた物語である。

南チロルとの和解

『イタリア女』に描かれたようなことは世界中どこでも、日本でも充分起こりうることだ。南チロルに限った話ではない。食事後のコーヒーを飲みながら、ツォーデラーは私に言った。この言葉は、拙論の中で彼を南チロルの代表的作家として論じたことへの反論だと思われる。確かに、彼の描いた事柄は南チロルにのみ当て嵌まるものではない。また、何が描かれているかということと文学的質は別問題である。それにもかかわらず私は、ヨーゼフ・ツォーデラーは68年運動の刻印を帯びた政治的作家であり、南チロルとツォーデラーの文学を切り離して論ずることは出来ないと考えている。

実際、言葉の端々から、彼の関心が政治的・社会的問題に向いていることが分かる。彼の書いたものには、政治への批判、歴史との格闘といえる要素があまりに多く、これを無視して文学的側面、つまり美的側面のみを論ずるのは片手落ちと思われる。正確に言えば、「政治的作家」というよりも、多数者論理で進められる政治に批判的であるという意味で「反政治的作家」と言った方がいいのかも知れない。何れにせよ、社会的・政治的問題を避けて通るような「非政治的」な人では決してない。

『イタリア女』を契機として「裏切り者」のレッテルを貼られた彼の本は、長きに渡って南チロルの書店に置かれることはなかった。彼の本が南チロルの人々に拒否されたのは、彼らがそこに自らの醜い姿を見たからである。カトリックやドイツの民族性を守るということが、住みなれた土地に執着し、気心の知れた同郷人だけで固まろうとする村人根性のカモフラージュであったことが、暴かれていたからである。こうした南チロル人の姿勢はしばしば „Mir sein mir“ 気質¹⁶⁾と呼ばれる。ところがそうした村社会とイタ

リア文化とが衝突したことにより、人々の心には限りない葛藤が生まれ、帰属性意識は揺さぶられ、彼らは繰り返し歴史への問いかけに駆り立てられている。

多文化社会としての南チロルに見られるこうした現象、それは極めて今日的で、かつ人間的な問題であるが、こうした問題を、身近な出来事やそれをきっかけとする私的想念を通して描き出そうとするのが、ツォーデラー文学である。それゆえ、南チロルという舞台を抜きにしてこの文学を語ることは出来ない、と思うのである。

ツォーデラーは去年、新作短編集『メラーンの空』によって、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ賞を受けた。これは、アテージア書店が授与する賞である。ヘルマン・レンツ賞（2003）や、イタリアのプレミオ・カトゥーロ賞（1986）といった権威ある賞を受けているツォーデラーが、あえてこのローカルな文学賞を辞退しなかったのはなぜか？ 彼が長年反発してきた保守的な南チロルとの和解を意味するのだろうか？

なるほど南チロルの政治的、文化的状況は、90年代の初めに明らかに変化した。南チロルの自治制度実現に寄与したジルヴィウス・マニャーゴが知事を退き、ルイス・ドゥルンヴァルダーに代わったことを契機として、文筆家アルミン・ガッターを教育文化部に迎え入れた県政府の文化政策は一大転換を見せた。ツォーデラーを初めとする批判者たちを、むしろ時代の先駆者として評価するようになったのである¹⁷⁾。ツォーデラーへのフォーゲルヴァイデ賞授与も、そうした流れを背景としているのであろう。

一方ツォーデラーが、「故郷防衛者」たちに心情的近さを感じ始めていることも明らかかなようである。それは、彼の新作『メラーンの空』や、前作『慣れることの苦しみ』に現れている。イタリアでこそ、「ドイツ語で創作するイタリアの作家」¹⁸⁾と看做されているツォーデラーだが、本人は繰り返し、「イタリアのパスポートを持ち、オーストリア文化に育まれたドイツ語作家」¹⁹⁾としての自覚を述べている。その文学的出自は明らかにドイツ語文化の側にあって、イタリア語・イタリア文学の影響は小さい。幼いころ南チロルを離れた彼がイタリア語を学んだのは、ボーツェンのギムナジウムに入りなおしてからのことだった。ドイツ語の使用が禁止されていたファシズム時代や、現在の南チロルの子供のように小学校からイタリア語を学んだわけではない²⁰⁾。また、出版した最初の詩集が南チロル方言で書かれていたことは、内容はどうあれ、この詩集が精神的故郷としての南チロルへの心情告白であったことを伺わせる。

小説『慣れることの苦しみ』では、昔は「故郷防衛者」に眉根を寄せ、不利な立場におかれた人々に味方し、異質なものに憧れを抱いていた主人公が、齢を重ねるに連れて心を硬化させ、自ら「故郷防衛者」になっていくさまが描かれていた。彼は、かつてファシストとして南チロルに入植したイタリア人に不快の念を抱くようになる。同じ心情は、今回の短編集の最後の作品『メラーンの空』にも描かれている。主人公は、森にゴミを落として行くイタリア人避暑客に腹を立てる。それは、かつて『イタリア女』の中で批判された村人たちの姿勢と、どう違うのだろうか。

思うに、ツォーデラーが院外野党運動に加わり、虐げられた少数派（それは当時はイタリア人労働者達であった）の側に立って戦ったのは、彼自身がファシズムによって抑圧され、移住させられた南チロルの貧しい労働者の子、という出自があったためではあるまいか²¹⁾。つまり、彼がドイツ語住民とイタリア人との共存に肩入れしてきたのは、

南チロル内の少数派であるイタリア人に、かつてファシズムに虐げられた南チロル人の記憶を重ねているからと思われる。要するに、イタリア人との共存を語るときにも、彼の本当の関心が向いているのは、南チロル人（と言うときそれは南チロルに住むイタリア人を含まない）社会なのである。

ツォーデラー自身は、自分を南チロルの作家と考えたことはない、と言う。「私が南チロルに住んでいるのは偶然だ」、とも言った。偶然ここに住んでいるから、小説の舞台もここになっているだけなのだ…。

作家は、コーヒーを飲んだあと、ブルネック中心街にある彼の住居へ案内してくれた。寝室と仕事部屋からなる簡素な住まいだった。学生のアパートと言ってもおかしくはない。書き物机の上には、執筆中の次の長編の手書き原稿が、分厚いバインダーに挟んで置かれていた。『残酷の調書』(*Protokolle der Grausamkeit*)という仮題が付けられている。南チロルトリサボンを舞台にしたものだという。彼の小説はいつも南チロルと、どこか遠い町を舞台にしている。「言うまでもないことだが、作家の自作解説など当てにしてはならない」、彼は何気なく言った。

テレンテンとツォーデラーの家

そのあと彼は、『イタリア女』や『慣れることの苦しみ』、そして『メラーンの空』の舞台となった村、テレンテンに連れて行ってくれた。まず、『イタリア女』の中で村人の溜まり場として描かれた飲食店に入った。傍目から見る限り彼は、活字など読むことのなさそうな地元の常連客らと、よく分かりあえているように見えた。『イタリア女』が書かれた当時、ここは村唯一の飲食店だったそうである。

「あの小説の主人公オルガは、私を描いたものだ」、と、このときツォーデラーは言った。確かに、こんな山村にイタリア人の夫人を連れて越してきた小説家は、村の中で浮いた存在だっただろう。というのも、ここには彼の家がある。建築家サンドラ・モレッコと結婚した際、農家の建物を買って改装したものだ。プスタータールを見下ろす斜面に立つこの家は、彼の小説に繰り返し登場する。典型的なチロル風農家の建物である。玄関の扉を開けると二匹の大きな犬が跳び出してきて、主人ツォーデラーと、客である私に跳びついてきた。歓迎の挨拶だろうか。

壁も天井も床も板張りの居間では、チロル地方に特有のタイル張り暖炉が一角を占めている。家の中にはサウナが作りつけてあり、離れは書斎として使っているという。今回訪れる前に貰ったファックスには、妻と別れたという意味のことが書かれていたが、別居はしていても、家にときどき帰り、夫人や娘さんと晚餐を共にしているという。夫人のサンドラ・モレッコは、『慣れることの苦しみ』に出てくる主人公の妻と同様、もの静かな人だった。美しい娘さんがいて、まだギムナジウムに通っている。晚餐は、地元の農家からもらった黒パンに、地元で出来たチーズやベーコンだった。飲んだ赤ワインも南チロル産だったと記憶している。

帰りにツォーデラー家を出ると、すぐ下に舗装された道路が見えた。さらに下の平地にはフランツェンス・フェステからブルネックを経て東チロルへ抜ける線路が走ってい

る筈である。夜のせい、樹木のせい、今は見えない。ツォーデラーが越してきた当時、この村には農家が点在するのみだった。今では近在の村々同様、ホテルやペンションが立ち並んでいる。観光業の盛んな南チロルは現在、かつてないほど潤っている。

『我々は去った』

ヨーゼフ・ツォーデラーが幼くして故郷を去らねばならなかった事情は、今回出版された短編集の冒頭を飾る散文『我々は去った』に詳しい。実はこの文章は新しいものではない。80年代に登山家であり政治家でもあるラインホルト・メスナーが編集した、『国籍選択』(1989)²²⁾という本に発表されたものである。文体も他の作品とは明らかに違っている。小説というより回想記という体裁で、サラッと読める。

ツォーデラーは、1940年冬、両親や兄姉と共に、メラーン駅を出発した。この年以降、およそ3万5千人の南チロル人が、イタリア・ファシズムに支配された故郷を捨て、ドイツへ移住したのである。どこに送られるのか、到着するまで彼らには知らされなかった。行き着いた先がグラーツであったことは、両親には幸運に感じられたであろう。ツォーデラーにとってもそこは思い出の町となった。本人に尋ねてみると、彼はグラーツに行ったときにこそ、帰ったような気がするという。

散文『我々は去った』は、ヒトラー・ムッソリーニ協定により南チロルを去ることになった人々の実際の記録であり、文学テキストというよりも現代史のドキュメントと言ふべきである。語り手が、歳の離れた兄に当時の状況を問いただすという体裁をとっている。歴史書でも知ることの出来る内容だが、一家族の体験として生々しく再現されているだけに、「事実」を連ねた歴史書を読むより面白い。「兄」とは、ツォーデラーの実兄である。今や90歳近くにもなるという本人は、弟の書いたものを一行も読んだことがないという。

自己治療としての文学

「私はいわば自己治療として書いているのだ」と作家は言った。そう言いながら彼は私に対して、疲れも見せず延々と自分のことばかり話し続けた。端々から、文学テキストとなったものの多くが人生に取材したものであることが分かった。毎朝5時に起きて午前中を執筆に当てているという。三行でも書ければ一日落ち着いて過ごすことが出来るが、三行すら書けないとき、自分を無に感じるという。

「あなたは繰り返し御両親のことを描いていますが、三人のお子さんについて書かないのはなぜですか?」「両親はもう死んでいるから、私が書いたことを彼らが読むことはない。しかし子供たちは、父親が自分について書いたことを読んだらどう思うだろうか。」もっともな答である。私はむしろ、なぜあなたは繰り返し御両親を描くのですかと訊くべきだった。私は、ツォーデラーの小説を読んで、彼の両親を個人的に知っているような気がしている。

短編集『メラーンの空』の第二作『父の死』と第三作『母の家』もまた、両親を描い

たものである。第二作は、今まで作品化されなかった父親の死のエピソードを伝えているが、どこまでが思い出でどこからが創作なのか見当が付かない。そもそもツォーデラーの小説に関して創作と回想の区別など意味があるだろうか。全てが主人公の意識に浮かぶ想念の連続であり、想念とは、それを思い浮かべた人が作家であれ主人公であれ、創作と呼ぶべきものではあるまいか？ ツォーデラーを読んでいると、私には主人公と作家自身の境界すらあいまいで、区別する意味のないもののように思えてくる。

メラーンの病院に入院した父を、兄と交代で看病するギムナジウム生の主人公は、担当の看護婦ラウラに恋をする。父の死を間近にしながら、主人公の心には世界への憧れ、生への渴望が燃えている。主人公はそれを、下宿しているポーツェンの繁華街を歩くとときに感じ、病院で働くラウラへの恋心として感じる。

ツォーデラーの小説に描かれるのはいつも、父母が体現する過去への執着と、異質な未知の世界への憧れである。この一見矛盾する二つの心情の共在は、南チロルと南国の海辺の町との対照として描かれることが多い²³⁾。この小説ではそれが、死の床に横たわる父親と、若いイタリア人看護婦ラウラの姿となって表れている。

ヨーゼフ・ツォーデラーの父は仕立屋の息子として生まれたが、第一次大戦にオーストリア兵として出征した際、仕立屋修行を中断した。彼がイタリア軍と戦っている間、兄弟が家業を継いだため、戦後、ホテルの用務員として就職し、そこでツォーデラーの母と知り合った。戦争中一度も戦場となることのなかった南チロルがイタリア軍に占領され、イタリア領となってしまったことに、彼は憤懣やる方なかった。棍棒を持ってイタリア人を襲撃するグループに加わったこともあったという。ファシズム支配下では完全に失業し、家族に食べ物を調達するため物乞いして歩いた。イタリア嫌いの彼であったが、仕事にありつくため、ファシスト党に入らざるを得なかった。その後、「楽園が待っている」と唆され、ナチ政権下のグラーツに移住したが、故郷を捨てたことを後悔せずにいられなかった。騙されたことを悔やみながらも、仕事を得るためドイツ軍に入隊した。戦争が終わるとまもなく、一家は南チロルに帰った。彼らはずっとその日を待ち侘びていたのである。

第三作『母の家』は、小説『ロンターノ』の中で使われていた文章を、改めて短編として独立させたものである。作家は、父の話のあとに母親のエピソードを入れたかったのであろう。ツォーデラーが南チロルを繰り返し描くことと、両親のエピソードを多く作品に織り込んでいるのは同じ理由からと思われる。彼の主人公は、スイスであれ、北米であれ、メキシコであれ、トリエステであれ、アグリジェントであれ、どこにいるときでも常に南チロルと両親に思いを馳せる。作家にとって両親のいるところこそ、帰るべきところだという意識があるのであろう。

『母の家』には、最晩年を迎えた母親の奇態な行動が描かれている。ベッドの周囲に毛布でテントを張り、その中で眠る母親。深夜、懐中電灯を手には家中を徘徊する母親。耳鳴り持ちらしく、ありもしないところに換気扇が回っていると言い張る母親。どこにでもある老後の問題を描いているように見えるが、何らかの問題提起があるわけでもない。過去の作品を知る読者はむしろ、『手を洗うときの幸福』や『慣れることの苦しみ』に出てきた母親の最晩年の姿を見出して、感慨に耽るだけである。この小説は、母親危

篤の知らせを「私」が受け取ったところで終わる。

四番目の短編『モニカ』は、南チロルの小さな村を舞台にしている。村とは、明らかにテレンテンである。モニカは村じゅうの厄介者である。薬物依存症の彼女は、語り手の家に現れては、「死ぬ」と言って手首を切る。語り手は幾度も彼女を病院に運び、不承不承身元引受人の立場におかれている。ある日、またもや彼女が自殺を図ろうとしたとき、村人の多くが心に抱きながら口にはしなかった考えが、語り手の頭に浮かぶ。「そろそろ終わりにしてくれ！」²⁴⁾ 村人達と同じく語り手自身も、モニカの死を望んだのである。

「この言葉ぐらいでしか、自分の内にある悪を表現することが出来なかった」、と、ツォーデラーは私に言った。村人たちは、自殺したモニカの葬儀に際し、雨の降り続く中、彼女の家の前に立ったまま動こうとしない。厄介者である彼女の死を待っていたことに、呵責を感じているのである。

五番目の短編『彼女の足の近さ』は、旅先での恋愛小説である。旅先はどこカラテン系の国の海辺の町であるらしい。一年ぶりに再会した恋人との別れを描いたもので、似たもの同士のすれ違いと、共感の機微を描いている。

最後の短編『メラーンの空』は、ツォーデラーが自らの存在を問い直すために書いたものと思われる。テレンテンに住む語り手が、メラーンやグラーツの思い出を振り返り、テレンテン近くの森や草原を歩きながら、ローマの町を想像する。イタリアとドイツ語圏という二つの世界を行きつ戻りつしてきた語り手（＝著者）が、「なぜ私はここにいるのか？私がどこかにいるとはどういうことなのか？そもそも私はなぜ存在しているのか？」²⁵⁾ という根本的な問いを、南チロルを舞台にして再度自問したのが、この短編である。

この短編にも表れているが、ヨーゼフ・ツォーデラーは、「南チロル小説」を意図しているわけではないと言いながら、やはり、国籍選択ゆえにこの地を去らねばならなかった移住者の体験を元にものを書いている。そこに描かれるのはいつも、永久に探求し続ける人間としての南チロル人である。自らの属す場所を探し続ける人、新しいアイデンティティーを構築しようと試みながら、いつも何かが零れ落ちていくことを認め、さらなる探求に駆り立てられる存在。ヨーゼフ・ツォーデラーは、そうした探求者を描く作家である。その意味で彼は、南チロルの移住者の子（*Optantenkind*）²⁶⁾であると同時に、国境や民族性という拵え物が意味を失いつつある現代の申し子であるとも言える。彼の文学はつまり、決してローカルな郷土文学などではなく、人間そのもののあり方に迫るものだと思うのである。

- 1) 本稿は平成17年度より交付を受けている科学研究費補助金(基盤研究(C))の研究成果の一つである。
- 2) 今井敦: ヨーゼフ・ツォーデラーと南チロル——多言語・多文化社会を描く文学——〔世界文学会『世界文学』第98号、2003年12月、76～85頁〕及び、Atsushi Imai: *Joseph Zoderer und Südtirol. Versuch über Zoderers Roman „Der Schmerz der Gewöhnung“*. Mitteilungen aus dem Brenner-Archiv, Nr.22, Innsbruck 2004, S.89-101.
- 3) ツォーデラーが1984年に述べた言葉 „Mein Stil ist die Ehrlichkeit“ (「正直さが私の文体だ」) は、この意味で理解することが出来る。Vgl. Christoph König: *Joseph Zoderer*. In: *Kritisches Lexikon zur deutschsprachigen Gegenwartsliteratur*. Hrsg. von Heinz Ludwig Arnold. München o.J. [Stand 1.1.1989], S.2.
- 4) 1939年6月23日ベルリンで、ナチス政権下のドイツとファシズム・イタリアの間で結ばれた秘密協定。南チロル人の国籍選択に関する協定で、ブレンナー以南に住むドイツ系住民は、年内にドイツ国籍かイタリア国籍を選ぶ (Option) よう定められた (ドイツ国籍を選んだ者は、当時のドイツ領内へ移住しなければならない)。86パーセントの南チロル人がドイツ国籍を選び、その内約7万5千人が、43年までに南チロルを去った。なお、本稿で南チロルの歴史に関して述べる時、特に明示しない限り次の三つの文献に基づいている。1) Rolf Steininger: *Südtirol 1918-1999*. Innsbruck/Wien (Studien) 1999; 2) Michael Forcher: *Tirols Geschichte in Wort und Bild*. Innsbruck (Haymon) 2000; 3) Alfons Gruber: *Geschichte Südtirols. Streifzüge durch das 20. Jahrhundert*. Bozen (Athesia) 2000.
- 5) 1939年の国籍選択の際にドイツ国籍を選んだ南チロル人のイタリア国籍取得は、1948年に認められた。これは、1946年9月パリで、デガスペリ (イタリア首相兼外相) とグルーバー (オーストリア外相) の間で結ばれた協定に基づく措置である。この「パリ協定」では、ドイツ系住民の民族性保護、ドイツ語とイタリア語の同格、母語による授業、ヒトラー＝ムツリーニ協定によりドイツ国籍を選んだ人々の国籍問題の見直し、自治権付与などが約束された。
- 6) *Das Literaturhaus in Wien, Autoren Portraits und Interviews: Joseph Zoderer zum 70. Geburtstag!* 26.9.2005: http://www.literaturhaus.at/buch/autoren_portraits/portraits/zoderer/
- 7) Joseph Zoderer: „*Ich schreibe über die Wunde*“. *Zum 70. Geburtstag von Joseph Zoderer*. (Interview) Dolomiten, Nr.272, 25. November 2005, S.15.
- 8) Ebenda.
- 9) Norbert C. Kaser: *Südtirols Literatur der Zukunft und der letzten zwanzig Jahre* („Brixner Rede“). In: Norbert C. Kaser: *Gesammelte Werke Bd.2 Prosa*, Innsbruck (Haymon) 1989, S.111-118, hier S.117.
- 10) Ebenda, S.111.
- 11) 初期作品は1993年から95年にかけてようやく出版された。Joseph Zoderer: *Die Ponys im zweiten Stock*. Erzählungen. Bozen (Raetia) 1994; *Der andere Hügel*. Roman. Bozen (Raetia) 1995; *Schlaglöcher*. *Dauerwellenroman*. Bozen (Raetia) 1993.
- 12) 当時„Südtirol“(「南チロル」)は正式な県名ではなく、„Provincia di Bolzano / Provinz Bozen“(「ボーツェン県」)と呼ばれていた。現在の県名は „Provincia Autonoma di Bolzano - Alto Adige / Autonome Provinz Bozen-Südtirol“(「ボーツェン・南チロル自治県」)となっている。
- 13) 注5参照。
- 14) Gerhard Riedmann, *Tiroler Tageszeitung*, 11.12.1974; Heinrich Stöberer, *Die Kronenzeitung*, 16.17.1974. Nachgedruckt in: Joseph Zoderer: *S Maul auf der Erd oder Dreckknuidelen kliabn*. Gedichte mit Zeichnungen von Luis Stefan Stecher. Bozen (Raetia) 2002, S.105, 107.

- 15) 以上、第5回インゲボルク・バッハマン・コンクールの様子については、次の記事を拠り所とした。引用もここに纏められた「審査員の評言」から採った。Gerhard Mumelter: *Ein Klima freundlicher Unerbittlichkeit. Joseph Zoderer beim 5. Bachmann Literaturpreis in Klagenfurt. Tandem*, 8.7.1981.
- 16) „Mir sein mir“ は、この地方の人々のよそ者に対する姿勢を表す表現である。標準語になおせば „Wir sind wir“ となる。つまり、「おら達はおら達だ（他の地方の者とは共感できない）」の意味である。Vgl. Joseph Zoderer: *Der Himmel über Meran. Erzählungen*. München/Wien (Hanser) 2005, S.129 und *Der Schmerz der Gewöhnung. Roman*. München/Wien (Hanser) 2002, S.169f.
- 17) Vgl. Johann Holzner: *Literatur in Tirol (von 1900 bis zur Gegenwart)*. In: *Handbuch zur neueren Geschichte Tirols. Bd. 2: Zeitgeschichte*. Hgg. Von Anton Pelinka und Andreas Maislinger. 2. Teil: *Wirtschaft und Kultur*. Innsbruck (Wagner) 1993, S. 209-269, hier S.265.
- 18) Christoph König: Joseph Zoderer, a.a.O., S.11. なお、ツォーデラー文学のイタリアにおける受容については次の論文に詳しい。Luigi Reitanni: „Lontano“. *Der „Italienkomplex“ in der deutschsprachigen Literatur aus Südtirol*. In: Johann Holzner (Hrsg.): *Literatur in Südtirol*. Innsbruck/Wien (Studien) 1997, S.54-76.
- 19) Joseph Zoderer: „*Ich schreibe über die Wunde*“, a.a.O., S.15.
- 20) ヨーゼフ・ツォーデラーは、4歳で家族と共にグラーツに移住し、南チロルに戻ったのは10代後半である。ちなみに彼の兄や姉はファシズム支配下の南チロルで小学校に通っていたため、宗教以外の授業は全てイタリア語で受けていた。現在の南チロルの小学校はドイツ語、イタリア語、ラディン語の学校に分かれているが、ドイツ語を母語とする子供にはイタリア語の授業が、イタリア語を母語とする子供にはドイツ語の授業がそれぞれ小学2年生から義務づけられている。
- 21) Vgl. Joseph Zoderer: „*Ich schreibe über die Wunde*“, a.a.O. S.15 sowie *Der Schmerz der Gewöhnung*, a.a.O., S.37.
- 22) Joseph Zoderer: *Wir gingen*. In: *Die Option. 1939 stimmten 86% der Südtiroler für das Aufgeben ihrer Heimat. Warum? Ein Lehrstück in Zeitgeschichte*. Hrsg. von Reinhold Messner. Aktualisierte Neuausgabe. München/Zürich (Piper) 1995 [Die erste Ausgabe erschien 1986], S.195-212.
- 23) 例えば『持続的な朝焼け』ではトリエステが、『海亀祭』ではメキシコのとある海辺の町が、『慣れることの苦しみ』ではシチリアの町アグリジェントが、南チロルから来た主人公の滞在地である。また、『メラーンの空』の5番目の短編『彼女の足の近さ』もラテン系の国の海辺の町を舞台にしている。ツォーデラーの作品に描かれた海辺の町は、ドロミテ山地で知られる南チロルと対照をなしている。
- 24) Joseph Zoderer: *Der Himmel über Meran*, a.a.O. S.78.
- 25) Joseph Zoderer: *À propos Heimat*. In: Johann Holzner (Hrsg.): *Literatur in Südtirol*, a.a.O., S.13-19, hier S.13. Vgl. auch ders.: *Der Himmel über Meran*, a.a.O., S.138.
- 26) 1939年のヒトラー・ムッソリーニ協定に基づいてドイツ国籍を選択し、当時のドイツに移住した人々の子孫はしばしば、„Optantenkind“と呼ばれる。